

女子の教育について

——ルソーからラクロへ——

津 倉 淳

かつてヴェルサイユの庭園を散歩していたあるバリの閑人は、自分の眼につくものから結論して、樹木というものは生えたときから刈込まれているものだと考えた。

——スタンダール「女子の教育について」——

一、問題の所在

この表題はいささか誤解をまねきやすい。わたしはここで女子教育の問題についても、この二人の作家の女子教育に関する意見についても、それ自身として論じようとするわけではない。むしろわたしの狙いは、一般的には十八世紀末から十九世紀にかけてのフランス文学におけるリアリズムの発展であり、特殊的にはそのリアリズムを通して現れる女性像の変遷である。

従つて「女子の教育について」という二者共通の主題は、⁽¹⁾上の問題に照明をあてるための媒材となるにすぎぬ。し

かしそれは、同時代における女性の心理的・社会的な地位にたいする観察と批判を直接的な形で示しており、そのことで作家の芸術的認識（創造）に至る以前の觀念形態をなまの形でわれわれに示してくれる。もちろんこの両者は内容的に必ずしも一致しないばかりか、時に（すぐれた作家にあつてすらも）矛盾することがあり得る。それはわれわれも承知している。だからこそ興味をひくのだ。この矛盾こそわれわれを作品創造という隠微な操作の解明に導いてくれるはずのものにほかならぬ。

更にまた、これらの作家が自分に課したこの問題は、現代にとつても決して古めかしいものではないとわたしは信じている。社会の変革期にあつて必ず問題となるものひとつが女性問題である。「被抑圧者たることは、婦人と労働者と同じである。」そして「彼女は奴僕のとつとめに服した最初の人間であつた」とともに、今日なお、労働者に先んじてそのつとめを脱しているわけではなく、全般的にいって事態はいぜんとして變つてはいない。もし作家が人間に関心をもつという意味で基本的にヒューマニストたらざるをえないとすれば、当然彼の関心は女性のこの、⁽²⁾ような状態に強くむけられずにはいないであろう。一世紀半も昔にルソーやラクロの示した関心が、ほとんどそのまま現代のわれわれにつながり、問題として提起されねばならぬということは、むしろ不幸なことですらある。わたしの関心もまた現在の立場を離れて存在することはできないのだ。

さてなにゆえにわたしがこれらの二人を選んだかという問題がここに残る。それは稿をすすめていくうちにおいおい明らかになると思うが、簡単にいうと、これら十八世紀末にあつて、それぞれはなはだ異質であるとはいえ、同じ書簡体を用いて劃期的な小説を書いた二人の作家の十九世紀文学にたいする先駆的な意義の再確認、およびリアリズムにおける復権を強調したいというのがひとつ。第二は、幸いにして彼らに女子教育とはつきり銘打つた論文があるという、いわば偶然的な事実⁽¹⁾に導かれたという簡単な理由。しかしこれは表面上そうなのであつて、二人にはこの問

題に關する当時の典型的な思考が働いていて、互いに密接な内的關連があるとともに、切迫した時代を反映していちじるしい進歩ないし發展が見られる。文学史の方法への一寄与として提出したい問題の一部がそこにあるとわたしは思つてゐる。

実をいふと、わたしは当初この二人に更にスタンダールを加えて論ずるつもりであつた。そうすることによつてフランス大革命の中にはさんだ二つのジェネレーションのあいだの關連と發展を見るつもりだつた。残念ながらそれはページ数と時間の關係で果さなかつた。⁽³⁾他日機会があり次第「スタンダールと女子の教育について」を執筆するはずである。そういうわけだから、今ルソーとラクロのみをあつかうことによつて、新たにそれはわたしにとつて、十九世紀フランス文学における女性像の創造へのイントロダクションとしての役割をになうことにもなつたわけである。

(1) ルソーとラクロが書いた女子教育についての論文、従つて当面の課題の主要な対象となるものは次のごとくである。

ルソー。周知のように彼の劃期的な教育論として『エミール』(一七六二)がある。その第五篇(くわしくはその前半)はすなわち女子の教育を論じたものにはかならぬ。J.-J. Rousseau, *Emilie ou de l'éducation*; livre V, *Sophie ou la femme*. テクストは『新エロイズ』(Julie ou la nouvelle Héloïse, 1761)とともにガルニエ古典叢書版を使用した。引例のページ数は岩波文庫版を示すが、訳文には時に変更がある。

ラクロ。驚歎すべき書簡体小説『危険な關係』の著者には、それぞれ未完に終つた女子教育に關する三つの論文原稿が残つてゐる。これについては後にくわしく紹介する。テクストはブレイヤード版全集。Choderlos de Laclos, *Oeuvres complètes*. Bibliothèque de la Pléiade. ラクロの引用はすべてこのすぐれた版による。

(2) August Bebel, *Die Frau und der Sozialismus*. 邦訳『婦人論』岩波文庫(上)二二一―四ページ。

(3) わたしがスタンダールの「女子の教育について」(『恋愛論』第五十四章)から幾つかの言葉をひいてエピグラフとしたのは、上の關連を幾分なりとも暗示するためと、果されなかつた計画についていささか自らを慰めるためにすぎぬ。

二、ソフイ または ジュリ

ジュリ・デタンジュが家の小間使のシェイヨから受けたいろいろの知識を喫くありさまを見るがよい。ルソーが虚礼の世紀に、あえて忠実な画家たらんとしたことを徳としなければならぬ。——スタンダール——

ルソーの方法はよく知られている。彼が学問芸術を論ずるときも、人間の不平等の起源を探るときも、また社会契約の方式をたてるときも、常に当時の特権貴族階級を中心とする社会の腐敗墮落にたいする強力な批判をテコにしている。この点に関してはルソーは十八世紀の他の啓蒙思想家たちとたいして異なるところはない。だが彼は、單にネガティブな批判だけにとどまることができなくて、積極的なテーゼを提出せざるをえなくなつた。教育について彼はこう云う——「わたしはただ、ずつと昔からこのかた、既に行われている教育にたいしては常に反対の叫びのみがあつたけれども、よりよき教育はかつて何人からも提唱されなかつたことを指摘するにとどめよう」(Emile, p. 11)。ここからルソーのいつさいの独自性と、そしてまた彼の自己矛盾がはじまる。いうまでもなく彼が当代の反措定として提出するものは例の「自然」にほかならぬ。彼は現在の止揚を未来にではなくて過去に求める。未来は現在における行動を予想する。逆に過去への視照は隠遁と孤独を導く。その晩年にあたつて『孤独な散步者の夢想』(Les Rêveries d'un promeneur solitaire)を綴るにいたつたルソーの心境は、それがいかに後の十九世紀文学に多くを残したにもせよ、彼の果敢な現実闘争にとつてマイナスであることは否めない。

それにもかかわらずルソーが大きな歴史的役割を果たした事情、フランス革命の偉大な先駆者として見做された事情は、この彼の反措定そのものにある。彼の自然主義がいわゆる科学的自然主義にたいしすぐれて道德的(かつ宗教的)な

自然主義であつたこと、「もはや存在せず、おそらくは存在したことなく、多分存在しそうにもない一つの状態、しかもそれについての正しい考えをもつことがわれわれの現在の状態をよく判断するうえに必要である」ような状態、そのためには「若干の推理を始め、時には若干の臆測をも辞さなかつた」ような人間本来の状態を想定したこと、一言でいえば、彼の理想状態の記述が、一々あくまでも現在の状態の否定ないし裏返しから出發しているということによつて、彼の批判の力はかえつて倍加されるのである。ここにわたしは（パラドクシカルに）ルソーのリアリズム、批判的リアリズムを認めるのである。

だが再びそれにもかかわらず、またそれ故にこそ、ルソーには奇妙な矛盾と限界が現れる。それがこれから検討しようとする女子教育の問題に特徴的に現れている。前にも述べたように、わたしはここでルソーの教育論自体を論じようとするのではない。近代文学の發展途上におけるルソーの位地を、その女性像によつて確かめようとするだけである。だからこそわたしはこの矛盾と限界に立止らざるをえないのだ。

ルソーは、同時代のデドロら百科全書派の人々が主として中流ブルジョアジーのイデオロギーを代表していたとすれば、彼は主として小市民・農民のそれを代表していたといわれる。⁽²⁾しかるに『エミール』におけるソフィや、『新エロイズ』におけるジュリの家庭は、落ち着いた地主的家庭として描かれている。「ソフィは生れが正しく、善良な性質である」(Emile, p. 751)。これは彼の互いに矛盾する思想的立場に相応する社会的立場、ここでは依存的人間としてのルソーが啓蒙されたブルジョアや貴族に結びついて例として説明されるが、⁽³⁾それにしても彼がエミールを教育する際には、社会の中に生きてゐる自然人をつくるという語義矛盾的な目的を課しつつも、なお市民の教育を中心眼目として在来の貴族的・教権的な教育とはつきり手を切ろうとする姿勢を示しているにもかかわらず、そのエミールの正当な配偶者としてのソフィは、最初から当時現存したような地方貴族的な家庭的徳の雰囲気の中に埋没させ

られている。すなわちソフィの父親は云う——「おまえのお母さんは地位のある身分だつたし、わたしには富があつた。」これは没落貴族と上昇ブルジョアジーの結合という、あのモリエールが十七世紀にすでに諷刺して以来のおさだまりの形式を思いださせる。だが「わたしは財産をなくしたし、お母さんは地位を失つた。」結果、彼らは「貧しきながらに幸福な」隠遁生活を享樂してゐる (p. 765)。

それでは『新エロイズ』のジュリの家庭はどうか。父のダタンジュ男爵は、レマン湖畔のヴヴエに快適な住いを営んでゐる。そしてジュリは結局恋人の平民サンブルーを断念して、父の意のままに男爵ヴォルマルと結婚し、派出なところはないが優雅であり、ぜいたくではないがゆとりのある田園生活を営む。とはいへ第五部書簡二に述べられているこの田舎貴族の生活の見取図は、われわれから見ればかなり豊かな上流階級のそれを思わせずにはいゝ。

不思議なのは、ルソー自身の分身であるサンブルーと、イギリスの名門エドワード・ボムストーン卿 (mylord) との異常な友誼である。二人は一時口論のあげく決闘沙汰にまで及ぼうとするが、ひとたび肝胆相照すや、エドワードは口を極めてサンブルーをほめあげ、ダタンジュ男爵にむかつて娘を彼に与えるようすすめる。身分意識の強い男爵はこれを拒絶するのであるが (第一部六二)、ここでわれわれがルソーの意図を善意に解するとき、人間の心はそのような身分の相違を越えて結びつくものであるし、またそうあらねばならぬということになる。またそう解すべきでもあろう。ただ平民サンブルー・ルソーは、何がゆえにその同盟軍をかくも上流の貴族仲間求めねばならなかつたのだろうか。ここに平民ルソーのインフェリオリティ・コンプレクスを読むのは少々読みすぎであるにしても、少くとも小市民・農民のイデオログであるはずのルソーが、ここで自分の階級的立場を放棄していることは確かである。もちろんこれはあながちルソーの罪とばかりはいえない。社会的な迫害やアンシクロペデスタたちとの不和に

よつて孤独と脅迫観念に押しつめられた彼の苦惱が、なんらかの理想ないし空想に逃れざるをえなくなつたときに必然にこうむる制約である。そしてそこからしてあの普遍的に見えながらも特殊であるところの女性の立場の考察がはじまるのである。

さて『エミール』の第五篇「ソフィまたは女子」は、まず「女性と男性との共通点と相違点」というア・プリオリな問題の調査からはじまる。もちろん彼はそのような相違自体が長い歴史の過程を通じてできあがつたものであることに気がつかない。ところで彼によれば「性に関係のないすべての点においては女はすなわち男」であり、「両者をもつ共通点においては両者は平等で、両者をもつ相違点においては両者は比較しえないもの」である以上、そこでは共通点は問題でなくなり、もつばら相違点だけが強調され絶対化されるのは自然のなりゆきだ (p. 669—671)。それゆえ「両者の教育が同じものであつてはならないということはその当然の帰結である」 (p. 681)。そこで先天的な「性」の相違を強調するところからどのような結果が生じてくるかは、数々のフロイトやヘンリー・ミラーをもつている現代のわれわれには先刻承知のことであるが、いつたいルソーはどのように論法をすすめようとするか。大前提はこうである——「両性の一致点においては各々の性は共通目的にたいして平等に協力する、しかし同じやり方をもつてするのではない。」「両性の一致点においては各々の性は共通目的にたいして平等に協力する、しかし同じやり方をもつてするのではない。すなわち一方は必然的に意志と力とを持たざるをえないし、他方はたいして抵抗しなくてもいいということになる」 (p. 671)。この性における予定調和の俗説がいかに危険なものであるかということはこの際問題ではない。むしろルソーがア・プリオリに規定したこの相違が、事実上、いかなる社会的立場ないし身分の女性に基礎を置いているかということの方が問題である。それはこの原則に続く驚くべき系からおいおい明らかになつてくるであらう。

「女は特に男の意を迎えるためにつくられたものである。」ここから女性の「魅力」^{シヤルム}「自尊心」^{アトールソソル}「小心」^{チミダテ}「謙譲」^{モダステ}「羞恥」^{オンクト}等々が次々と生れてくる (p. 611)。注意したいのだが、これらの諸徳目は、自然が女性に与えた本性だとされていることだ。桑原武夫氏はこれを彼の性格と限定されたつきあいという個人的な理由(だけではないが)に帰していられるが、⁽⁵⁾しかしわれわれは、ソフィヤジュリがどのような環境に生きているかをすでに前もつて調べておいた。そこで以上のような徳目が、主としてどのような身分上・階級上の立場に現にあるが、まことに適合するものであるかを見ればよいのである。上にあげた数箇の徳目には実は序列がある。それは「男の意を迎える」(plaire à l'homme) という原則を満すために、この順序に従つて次々に要請されるものである。そしてルソーは最後の「羞恥」を特に強調する。これに関してわれわれはルソーの「自由」の觀念に触れることになる。彼によれば、神は「人間に無限の欲望を賦与するとともに、この欲望を統制する法則を与えて彼を自由ならしめ、自己の主人たらしめたのである。」これを男女別にいうと「男には飽くことを知らぬ情熱^{パッション}を許したが、この情熱にそれを統御すべき理性^{レゾン}を加えたのである。女には無限の欲望^{アヅール}を与えたが、これを抑制すべき羞恥心^{ビユドゥール}を加えたのである」(p. 763)。必然を甘受することによつて自由となるこのストア的⁽⁶⁾自由の觀念こそ、まさしくソフィヤジュリの家庭、地主的没落貴族の家庭にふさわしいものではあるまいか。だからこそ「羞恥心」その他の徳目が、彼女たちに本来備わるべきものとして要請されたとしてもなんの不思議もないはずである。

こうして「弱きもの」としての女性のカリキュラムが組立てられることになる。これは一見してわかるように、まったく男性中心的、家庭中心的なものである。

一、体育。男子の場合と同様主んじられるが、それは「男たちのため、また彼女らから生れてくる人々のために丈夫でなければならぬのだ」(p. 687)。

二、德育。男と違つて従順や克己が尊ばれる。そのため早くから拘束や強制による教育がほどこされねばならぬ。こうしてできあがつた従順さは「彼女らが男なり男の命令なりに永くつかえねばならぬものである以上、そしてこうした男の考えを押えることが許されていないものである以上、彼女らにとつては一生必要なものである」(p. 696)。

三、知育。裁縫、画、^{ドイツ}勘定、^{サレ}策略の才、男の研究がすすめられる。読み書きは早くから教える必要はなく、思弁的な学問や精密科学は女性にはむかない。「彼女らの研究はすべて実践に関するものでなければならぬのだ」(p. 736)。

四、宗教教育。これは早い方がよい。それはこのような深遠な問題を正式に論議することは女性にはできないからである。またその宗旨も父や夫のそれを教会の決定として受入れさえすればよい(p. 771-2)。

以上の通りである。誰が見てもわが国の『女大学』を思わせるはずである。違うところは、後者では全般的な封建的主従関係がそのまま反映されているのに反して、ルソーのカリキュラムは、まずもつて上流貴族社会のイデオロギ―に反対するところから出発して、そのアンテテーゼとしての市民的・家庭的徳を強調しているところにある。⁽⁷⁾そこでは女性を男性に従属する立場に立たせながらも、なおかつそれは両性をして自然の共通の目的に到達せしめるための協力の形式なのであつて、当然女性を独立の人格と認める基本的なヒューマニズムを失わない。この点で女性を男性の道具ないし奴隷と見立てるわが国の封建的女性道徳とは根本的に異つている。この点だけでもそれはそのまま今日の日本にたいして充分の意義をもつていであらうが、それより一そう重要なのは、上に見たような限界をそれとして認めることによつて、その歴史的な位地と役割を評価することである。

こうしてルソーがつくりあげた理想的女性ソフィは、とりわけ没落した地方貴族ないし中流ブルジョアジー(ルソー流に啓蒙された)の家庭の女子に限定され、またそのような女性としてジュリは美しく描きだされた。残念ながら

『新エロイズ』はその饒舌と説教癖とセンチメンタリズムによつてとうてい今日の読者を捉えることはできないであらう。けれどもそれは当時の読者層をいちじるしく拡大し、ベスト・セラーの第一位にのしあがつたのである。かつまた『エミール』と『新エロイズ』には後の『夢想』とつながるところがあつて、社会革命にたいする絶望と、孤独と隠遁の趣味に色づけられているが、その出発点にあるところのルソーの果敢な精神と善き意志とは、彼を送りだした階級の行動的エネルギーにとつては決して見誤られることはなかつたのである。

- (1) 『人間不平等起源論』(Discours sur l'origine de l'inégalité parmi les hommes, 1754) 岩波文庫版三一ページ。
- (2) アルベール・ソブールも、富裕なブルジョアジーに結びつくヴォルテールにたいして、ルソーが小ブルジョアジーと手工業者たちのイデオロギーを代表することを認めている(『フランス革命』岩波新書(上)三二二ページ)。
- (3) 桑原武夫編『ルソー研究』(岩波書店)一六ページ。
- (4) ジュリの女友クレールの言葉「デタンジュ男爵ともあろう人が、自分のひとり娘を、財産もない小市民 (un petit bourgeois sans fortune) に与えるなんて！」(第一部書簡七)。
- (5) 『ルソー研究』三四三ページ。
- (6) これは子供の教育にあつては「事物の必然性」となり、国家社会にあつては「法」となる。『ルソー研究』中の野田「ルソーの哲学」(特に五三ページ)参照。
- (7) 例えば、前者にあつては、未婚婦人は徹底的な純潔を要求され、結婚後の放縱は大目に見られるに反し、後者にあつてはこれを逆にいつて、相愛の未婚男女の關係は正式結婚に劣らず神聖とされ、一たん家庭の主婦となればあくまで貞節を守るべきであるとされる。ジュリを見よ。
- (8) このことはルソーがその女性道徳を適用させようとした田舎貴族の当時の実情と關係があらう。彼がソフィやジュリの家庭をいかに美しく描こうとも、その田舎貴族の全般的な状況、貧困と不遇とそして憤懣(宮廷貴族にたいしてもブルジョアジーにたいしても)とは、ほとんど現實的解決を不可能にしていた(ソブール、前掲書、一一一―一二二ページ)。

三、メルトウイユ夫人かトゥールヴェル夫人か

偶然と愚劣きわまる虚栄心の果実である現行の女子教育では、彼女ら自身の幸福でもありまたわれわれ男性の幸福ともなる、彼女らの最も輝かしい、最も豊かな能力を眠らせてしまっただけだ。
——スタンゲール——

ルソーの社会批判の潜在的エネルギーは、そのあらゆる矛盾にもかかわらず炎のように燃えあがり、燃えひろがった。没落しつつある支配階級にたいする正面きつた攻撃にも事欠かない。革命は真近いのである。上昇しつつある階級・ブルジョアジーは、更に文学において痛烈な批判者を送りだす必要にせまられている。

突如、一七八二年、「危険な関係、セー・ドウ・エル・氏により某社交界で蒐集され、他山の石として公にされた書簡集」⁽¹⁾なる四巻の書物が上流社会のセンセイションをまきおこした。「新エロイズ」や「エミール」が発刊されてから二十年後のことである。

ムフル・ダンジェルヴィルは、その年五月十四日づけの日記に書いている——

「小説『危険な関係』は、どうやらそこに何か当てつけがあるらしいとして、非常なセンセイションをまきおこし……社交界の男女の大立者たちの急所を突くものだということになつたので、官憲はその発売を差止め、それが読まれている公の場所では今後カタログに載せることを禁止させた……」⁽²⁾

それにもかかわらず人々はあらそつてこれを読んだ。読みかつ憤つた。王妃マリ・アントワネットも一本を処蔵していたのは有名な逸話である。この本のもつ重大な意味は、後世の文学史家よりも当時の人々の方がはるかに正確に見抜いていた。⁽³⁾チイ伯は三十年後に幾分苦々しい面持で当時を回想し、この小説を批評している——

「なるほどそこには悪意の調子はほとんど見られず、時に真実さえある。しかし誇張と諷刺のほうがもつと多いのであつて、実情にうとい人々は、それをあたかもある特定の階級に一般的な見事な風俗画であると考へた。そう見る限りこれはとうとうとして宮廷をひたした大海の只中に流れこんだ革命の大波のひとつなのである……」

わたしはこの書を、十八世紀の末葉に、燃えあがる大空のもとに現れたあの不吉な流星のひとつと見做す。⁽⁴⁾

この端倪すべからざる書簡小説、この「革命の大波のひとつ」を書いたビエールアンブロワズ・ラクロワ・コデルロス・ドゥ・ラクロ (Pierre-Ambroise-François Choderlos de Laclos, 1741—1803) は本職は軍人であつた。

その宿命的な \wedge de \vee にもかわらず、彼の境涯は、名門という後楯もなく、大した財産にもぐまされず、せめて軍人にでもなつて世に認められようとする野心的な小ブルジョアのそれにすぎなかつた。⁽⁵⁾ ところが一七六三年、ちょうど彼が軍隊生活に入つた年、パリ条約が調印されていわゆる七年戦争が終りを告げ、その後三十年間フランスは平和の時期に入る。花々しい勳功によつて名を為そうとした一介の野心的な将校にとつては、憤懣と憂鬱の種であつたろう。たまたま一七七九年、アメリカの革命を援助する義勇軍が募集され、ラクロ大尉は直ちに応じたが、事志と違つてイギリスに備える要塞構築のため北仏の孤島レ島 (Ile de Ré) に送られた。⁽⁶⁾ そして軍隊生活にたいする失望をまぎらすために、「大衆にとつてもまた自分自身にとつてもまことに幸いなことには」今後公にされる心配のないような悲歌や書簡詩を書いたり、「たいした昇進も名声もえられそうにない仕事を勉強したあげく」遂に彼は「常道からかけ離れた仕事で、世の評判ともなり、この世を去つてからもなお名の轟くような仕事をしようと決心」するに至つた。⁽⁷⁾ 以上が『危険な関係』成立の事情である。

現在残つてゐる価値の低い詩数篇をのぞいて、ラクロの文学的な仕事はこれひとつである。その意味でラクロの生涯は、ジュール・ジャンのさうように、『危険な関係』をもつて終るといふこともできよう。しかし彼の生活その

ものはその後波瀾重疊をきわめる。一七八八年、オルレアン家のフィリップの陰謀に加わつた後、一七八九年、革命とともに彼はジャコバン黨員となり、その後ナポレオンの知遇をえてイタリアに派遣され、一八〇三年、南伊タラントの地に没するまで、彼は幻滅と不遇にもかかわらず、終止変らぬ共和主義者として自己の階級に忠実にその生涯を生きたのである。

このような人物として彼はその女子教育論を書いた。これはわが国にまだ紹介されていないので少しくわしく述べておこう。

I 一七八三年（すなわち『危険な関係』出版の翌年）、シャール・ヌール・マルヌのアカデミーが「女子の教育を完全なものとする最上の方法は何か」（*Quels seroient les meilleurs moyens de perfectionner l'éducation des femmes*）という懸賞問題を課した。マルトウイユ夫人やトゥールヴェル夫人をつくりだした人物は、直ちにこれに応えて講演原稿を起草した。手稿には三月一日の日附がある。これはプレヤード版で二ページ半の短いもので、未完に終つてはいるが決定的に重要な発言を含んでいる。

II ところで彼はこの主題を放棄したわけではなく、講演にはもろきれない内容を更に発展させようとした。これが『女子とその教育』と題される十二章からなる論文である（プレヤード版で四十三ページ）。ラクロの女子教育論の主体をなすもので、以下各章について簡単な梗概をしるす。

第一章「女子およびこの著作の目的について」自然のままの女性についての在来の説を採用して、自己保存と種族の保存が自然の彼女に与えた法則であると、まず自然状態から今日に至るまでの女性の歩みをあとづけ、しかる後今日の制度によつて女性がどのように道を踏み迷わせられねばならなかつたか、またどのようにして本来の自己を取戻すべきかを探求しようとする。

第二章「自然の女について」 自然の女は男と同様自由で強い存在であつた。男がすべてを腐敗させてしまつた。

第三章「幼年期について」 子供が生れてから母親の手を離れるまでの期間が考察される。

第四章「同一主題のつづき」 前章につづいて子供が両性に区別されるまでの、いわゆる第二の幼年期の素描。

第五章「青春期について」 さまざまの生活様式と環境とから、この時期に性がわかる。しかし自然の女にあつては、われわれ文明人のように、まだ充分成熟しきらぬうちに想像によつて異常に性欲を早めるようなことはない。

彼女は自然が彼女を押すがままに成熟するのを待つて内部を燃やし男を求める。このくだりの文章ははなはだ精彩に富んでいて印象的である。

第六章「成年期について」 この時期は身体の完全な成熟をもつてはじまり、子供が生めなくなつて終る。この期の女には美と愛が現れる。とはいえ文明の女とは異り、自由と力と健康を失わぬ。

第七章「老年および死について」 自然の女は不必要な心配事とか未来にたいする危惧とかを抱かず、ただ現在の危険と苦痛にのみ耐えてこれらを受入れる。

第八章「ここまでの反省」 このような自然の女の幸福には、広大な領土をもつ女王のそれといえども比較することはできない。いつたいこのような幸福な自然状態は本当に存在したろうか。

第九章「自然状態に反対するさまさまの理由の検討」 ここでは自然状態とその幸福の説に反対する立場をビュフオンとヴォルテールに代表させて批判する。結局自然状態が存在しないという証明は不可能である。われわれはこれを出発点として、社会がどのように女性を変化せしめたかをしらべよう。

第十章「社会が与えた最初の影響について」 自然は自由な存在のみを生みだす。社会は暴君と奴隸しかつくらない。両性に関しても、女は男の奴隸となる。その本来の力は策略となり、美と愛からは嫉妬が生れる。これが男女間

の関係を全面的に変えてしまった。美の形態的効果的な多様性もそこから生れる。

第十一章「美について」 女性の美の定義はなかなか困難である。だが簡単にいえば、それは快楽を受けるのに最も適した外形にすぎぬ。自然的な美は新鮮さと上背と力との結合であつた。だがそれも社会の出現とともに、時と場所に応じ、また精神的なニュアンスも加わつて変化するようになった。しかし上の定義は完全に減じてしまうことはなう。

第十二章「裝飾について」 これは女性がおのずから上の定義に従つてゐる証拠である。裝飾には二通りある。一に身体をできるだけ完全な状態に保つこと、二に衣服や装具から最も有利な部分をひきだすこと。眞の裝飾は健康と清潔を保つことで、技巧は自然を援けるべきであつてこれを変更すべきではない。自然にさし示された道を通つて目的に達せよとラクロは教える。

……ここでこの論文は中断してゐる。ラクロは第一章で約束した社会制度による女性の墮落とその救済法を具体的には論じていない。しかし以上の中で、われわれは多くの興味ある考察に接するのみか、Iの講演原稿の中にその明確な答をさえ見出すことができるのである。

■ 更にもう一つの論文が残つてゐる。これはその最初の刊行者であるジャン・タニャン・ブヴレによつて「女子の教育に関する試論」(Essai sur l'éducation des femmes)と名づけられてゐるが、手稿には題名はしるされていない。プレヤード版で十ページ足らずのもので、前二者と同様未完である。

これは第二の教育たるべき読書を扱つたものである。その内容は時にモンテーニュ、デカルト、ルソーらを思わせるものがあつて特に新味はない。ただラクロにあつては、読書について女子が男子とまったく同等の取扱ひを受けているという点が特徴的である。その範囲はモラリストの書物からはじまつて歴史・文学から旅行記にまで及んでい

る。時代的にはやはりギリシヤ・ラテンの古典がすいせんされて、近代のものはそうとう注意して選択しなければならぬとしている。若い女性は読書によつて單に教養を高めるだけでなく、また幸福にもなるとラクロは説いている。

さてこれらの論文はようやく今世紀に入つて初めて公刊されたもので、ルソーの著作のように一般になんの影響も与えているわけではない。またその内容もしばしば云うとおりすべて未完に終り、獨創性もたいしてなく、論文そのものとしてはあまり重要ではない。従つてその検討はもつぱら『危険な關係』に現れた女性像、およびそれらを創造したラクロの意図を明確にするという目的に限定される。

ラクロもルソーと同様、ひとつの理想的な自然状態を想定する。そしてそれが想像により、また現在の社会状態にたいする反措定であることも同様である。「少くともわれわれの想像の中で、社会がわれわれに見せてくれないものを探索しよう」(p.447)。

事案到るところでラクロはルソー流の發想法を受継いでいる。自然の幸福を論ずる際にも、事物の本性を明らかにするために、歴史的眞実よりも仮設的条件的な推理をとらうというルソーの『不平等論』の言葉を引用しているし(p.43)、自然状態についてのルソーの説に喰つてかかるヴォルテールにたいして前者を弁護している(p.454)。更に『第四章の冒頭で、幼年期をあらわすただ一つのフランス語(enfance)にたいしてラテン語には二つある(infans, puer)ことを注意するに至つては、これは『エミール』第二篇の冒頭そのままである。いつたいラクロは、このような論文を書くことによつて、偉大な先輩ルソーにあやかろうとしていたのではないかと邪推したいくらいだ。

だがそれにもかかわらず極めて重大な相違が存在する。第一に、女性に關しても徹底的に(といふのはルソーのよう)に現存のなんらかの階級の状態をあいまいに反映したりせず(この自然状態を追求していることであり、第二に

それを單なる「推理」「憶測」(ルソー)にとどめずに、あくまでその存在の可能性を論証しようとする。少くともそれが存在しないという確証はないことを証明しようとする⁽⁶⁾(p.457)。

更に特徴的なことは、ルソーが理想の女性を描く際の最大関心事が「徳」(vertu)であつたのにたいして、ラクロのそれはとりわけ「幸福」(bonheur)である。「自然の女は、男と同様、自由で強い存在である。自由であるというのは、自分のさまざまな能力を全的に發揮できるということであり、強いというのは、それらの能力が自分のいふる必要に比例するということである。このような存在は幸福であろうか? しかり、疑いもなく」(p.421)。

ここに「自由」の完全にメタフィジックでない最初の定義のひとつがある⁽¹⁰⁾。そして具体的な必要を具体的に満足させる可能性に「幸福」を見る態度⁽¹¹⁾、われわれはここにスタンダールの「幸福の追求」⁽¹²⁾の萌芽を認めることはできないであろうか。そして更にマルクスのあの「各人には必要に応じて」を。

女性もこの例に洩れるものではない。女性が幸福であるための必要な条件は「自由」⁽¹³⁾、「力」⁽¹⁴⁾、「健康」⁽¹⁵⁾、そして充分な条件はこれに加うるに「美」⁽¹⁶⁾と「愛」⁽¹⁷⁾(p.442)。

いうまでもなくこれらはすべて時間的なカテゴリーになおせば過去に属する。これは時代の大きな思想的限界である。だがまた、それゆえにこそここで当面の批判の対象が問題となる。そして『危険な関係』の世界はまさしく全面的にその対象なのである。これが、この小説の上流貴族社会に与えた恐怖とスキヤンドルの意味するものにほかならぬ。

ラクロの大前提、いつてみればその不当前提 (néfation de principe) は次のごとくである——

「自然は自由な存在しか生まない。社会は暴君と奴隷だけをつくる……力⁽¹⁴⁾の不平等な二人の人間のあいだにできる約束は一人の暴君と一人の奴隷しかつくらず、またつくらざるをえない。従つて両性の社会的結合にあつては、一般に

より弱く女性は、一般に抑圧されざるをえなかつた⁽¹⁵⁾」(p.457)。

この抑圧された弱い女性の中から二人の犠牲者が生れる。しかし「犠牲者」とは何か。「このような〔現代の法律や風習という〕障碍にもかかわらずよりよき教育を身につけたような女性が出たとすれば、それは彼女にとつてもわれわれにとつてもいつそう不幸なことである」(p.427-8)。これこそトゥールヴェル法院長夫人の美しく悲しい姿にほかならぬではないか。そのゆえに彼女はわれわれの同情をそそる。ところが反対に、われわれの嫌悪をそそる犠牲者も一人いる。修道院の教育を終えたばかりのセシル・ヴォランジュだ。ルソーはこの二人の出現を予期してでもいたかのように既にいつている——「もちろん敬虔深く賢明に育てられた娘なら誘惑にうちかつ強い武器をもっている(トウルヴェル夫人を見よ)。ところが單に敬神的なたわごとをその心のなかに、あるいはむしろその耳のなかにつめこまれているにすぎないような娘となると、巧みに襲いかかる最初の誘惑者の餌食となつてしまうのは必定だ(セシルを見よ)」(Emile, p.748-9)。ポードレルが「低脳で、さかりのついた犬みたいな、いやつたらしい小娘の完璧なタイプ」とこきおろしているセシルの犠牲にはなんの悲劇味もないのに、一方トゥールヴェル夫人の悲劇は真にわれわれの胸をうつ。ここに『危険な関係』の秘密のひとつがある。

彼女がヴァルモンの誘惑にうちかつた「武器」とは何であらうか。

「抑圧と侮蔑は生れくる社会における女性の分前であつたし、また一般にそうあらざるをえなかつた。このような状態になつても彼女らは力を失わなかつたが、ついに永い間の経験によつて彼女らは力を策略に代えることを学ぶに至つた」(p.459)。

われわれはルソーが女子の知育のなかに策略の才をかぞえたことを思い出すであらう。ラクロはルソーと違つてそれがやむをえず「永い間の経験」、すなわち歴史的な産物であつて、なにも女性にとつて本質的なものでも絶対的な

ものでもないことをはつきり見抜いている。これに続く数行によつて、ラクロは「魅力」以下、ルソーの掲げた徳目がすべて女性の自然状態に属するものではなくて、やはり歴史的な過程を通じて得られた現代女性の特徴として描き出しているところに注目する必要がある (P. 459—460)。

有徳で賢明だといつても、トゥールヴェル夫人は現代女性であることを免れない。彼女ですらも、弱きものである以上、力に代えるに策略をもつてしなければならぬ。

「用心深いとか巧者であるとかいうことにかけては、わたくしはさておき、いつたいあなた以上でない女があるでしょう。か。どうでしょう、法院長夫人はあなたをまるで子供あつかいにしているではありませんか」(書簡八一、メルトウイユ夫人からヴァルモンへ)。

このようなやむをえざる制約を蒙りながらも、トゥールヴェル法院長夫人は『危険な関係』に登場する女性のうちでほとんど唯一の肯定的なタイプである。それは彼女が「女子とその教育について」のなかで描かれている自然の女性ではない。また『危険な関係』のなかで彼女だけが唯一の愛することのできる女性であるということでも充分ではない。それだけではリアリティに乏しい。重要なことは、彼女が只一人ブルジョアジーに属する女性として描かれているという事実である。このことはボードレルの炯眼がいち早く見抜いていた⁽¹⁷⁾。だからこそ、彼女は死なねばならぬ。彼女は頹廢した現代社交界の障碍のなかに投げ出された真の意味の犠牲者である。

いつたい救い道はあるのか。全般的な女性の奴隷状態と女子の教育とはそもそも両立することなのか。ラクロは叫ぶ——「女子の教育を完全なものとする方法はまつたくない」⁽¹⁹⁾ (I, p. 47)。そして「大きな革命によらぬかぎり奴隷状態から脱する道はないと理解せよ。」更に続けて「そのような革命は可能であろうか? 答ができるのは貴女がた

だけだ。なぜならそれはもつばらあなたがたの勇氣にかかつているからだ」(I. p. 429)。それから八十五年後に、アウグスト・ベールはいつている——「労働者がブルジョアジーの援助を期待しえないと同様に、婦人も男子たちの援助を期待してはならぬ⁽²⁰⁾」と。

残念ながらわれわれはここでラクロの女性像の検討を終ることはできない。なぜなら、トゥールヴェル夫人という美しい形象にもかかわらず、『危険な関係』はなによりもまず批判と攻撃の書であるからだ。そこには他のすべての人物を操るメルトウイユ夫人という怪物が居残っているからだ。なぜなら、ラクロが最も筆先に力をこめて描いているのはこの身分の高い侯爵夫人にほかならぬからだ。

この典型の創造については多くをいう必要はない。ラクロ自身が見事な解説を与えている。今それを引用しよう。

「わたしは彼〔タルチュフを書いたモリエール〕と同様、あちこちに散らばっている同一性格のさまざまな特徴を一個の人物に集約することができました。そこでわたしは、墮落した女たちが、自分の悪徳を偽善的な風習で陰蔽しながらあえて冒してきた数々の悪事を描きました。少くとも描こうとしたのです」(Lettre à Madame Riccoboni, p. 714)。

そしてリコボニ夫人の、模範となるよりも嫌悪の対象となるような女性を描いたという非難にたいしてはこう答える——

「真似てみたいと思うような感情を描くということも確かにすぐれた功績です。しかしそのことは、それに抵抗しなければならぬ感情は描く必要がないということにはならないとわたしは信ずるものです」(Ibid., p. 721)。

このおだやかな口調のなかに、われわれは批判的リアリズムへの確かな意識を認めないわけにはゆかない。彼はこのような典型を、何人の希望的観測にもかかわらず、没落しつつある支配階級のなかにその眼でしかと見たのだ⁽²¹⁾。

しかもその内部からではなく、まさにそれに対立する階級的立場から、義憤をこめて、しかも「冷静且秩序正しく」見たのだつた。チイ伯にとつて「誇張」と見えたものこそ実は典型なのであり、それゆえにその「諷刺」は結果として十全の力を發揮することができたのである。⁽²²⁾ポードレールのあまりにも有名な言葉に従えば、「この本は、もしそれが焼くとすれば、氷のように焼くほかならぬ」のだ(Motes)。

なるほどそこでは、トゥールヴェル夫人をのぞいて(それも結局は犠牲に終る)、ほとんどの女性が否定的なタイプとして描かれている。しかしそれは批判的なりアリズムの基本的性格である以上、その批判の力、攻撃の武器としての役割はいつそう倍加されるはずのものである。

ラクロは『危険な関係』において現代の女性の実体を冷徹にえぐりだし、『女子の教育について』で自然における理想的な女性の姿を感動的に描きだした。そして前者から後者へ至る道はない、すなわち女子教育を完全にする方法は存在しないというパラドクスから出発して、社会の全面的な改革、「大いなる革命」に期待を寄せた。期待しただけでなく自らその渦中にとびこんだ。そしてフランス革命においてわれわれは多くの女性の英雄たちの姿を見るのであるが、⁽²³⁾それは例えばあのオランプ・ドゥ・グージュのように、一七九三年に宣言された人権が單に男子の権利にすぎぬことを見抜き、『婦人の権利』を起草して、「婦人にして断頭台にのぼる権利があるならば、演壇にのぼる権利もまたなければならぬ」と喝破したような女性であつた。しかし彼女の要求は満されなかつた。否、かえつて「断頭台にのぼる権利」だけが認められた。同年十一月三日に彼女の首は落ちた。⁽²⁴⁾

こうして新しい世紀に入つてもなお、女性の抑圧は絶えず、それゆえにその独立と平等への希求も絶えることがなかつた。文学における女性像の変遷も、いぜんとして苦しい歩みを歩むのである。レーナル夫人からボヴァリ夫人へ

と、それは作者自身の好意と共感を得つつも、なお抑圧された女性としての矛盾を取扱いはしなかつた。われわれは女性についての善き意志と女性像の美しい創造との見事な結合を、とりわけスタンダールに見出すことができるはずである。

- (1) *Les Liaisons dangereuses, ou Lettres recueillies dans une Société et publiées pour l'instruction de quelques autres, par M. C... de L...;...M. DCC. LXXXI...*
- (2) *Moufle d'Angerville, Mémoires secrets...; t. XX.*
- (3) 『危険な関係』(およびその作者ラクロ)については、在来の文学史では不当に過小評価されている。好色文学とさえ見なされている。ランソンの『フランス文学史』では名前さえ見えない。しかしスタンダール、ボードレルをはじめ、多くの作家たちはこれを極めて高く評価した。ジッドがフランスの十大小説のひとつに数えたのは有名である。
- (4) *Mémoires du Comte Alexandre de Tilly, pour servir à l'histoire des moeurs de la fin du dix-huitième siècle, t. I.*
- (5) 祖父の死亡証明書『*Pierre Choderlos, bourgeois de Paris, âgé de 49 ans, demeurant rue Montmarire.*』一家が爵位なしの貴族に列せられたのはピカルヂおよびマルトワ県の総代理人(*subdélégué général*)次いで秘書官となつた父の時代である。
- (6) 一説にエクス島(*l'île d'Aix*)にあり(*Pariset, Notice sur Laclous*)。
- (7) *Paroles de Laclous, citées par Tilly.*
- (8) IとIIは一九〇三年、IIIは一九〇八年。
- (9) もちろんこれらの論証は今日いわゆる「科学的」なものでなくて、むしろ当時いわゆる「哲学的」なものである。なおロ

ジェ・ヴァイヤンは、このようなラクロの論理の強靱さを彼の「冷静で秩序だった」(Tilly) 性格と、深い数学の教養を必要とする砲兵将校としての闘歴に帰している (Roger Vailland, *Laclos par lui-même, aux éditions du Seuil, 1953*)。

(10) ルソーの抱いた「自由」の観念と比較せよ。

(11) ビュフォンの、「幸福であるためには何も欲しないということ以外になにがしろう」というシニクな問いにたいして、ラクロは「幸福とは何も欲しないところにあるのではない、自分の欲するものを手に入れるところにあるのだ」と明快に答える (p. 449)。ついでながら、ここに「自分の欲するもの」をいつも取逃してきたラクロの悲痛な心境を読もうと思えば読めぬこともない。

(12) 「フランスには、財産があるために何も仕事をしなくてもいいような女がおそらく五万人もいるだろう。しかし仕事なしには幸福はないのだ」(スタンダール「女子の教育について」)。

(13) ルソーのあげた諸徳目と比較せよ。

(14) 「人間は生れたときは自由である。しかも至るところで鎖につながれている」(ルソー「社会契約論」)と比較せよ。

(15) 「家族・私有財産および国家の起源」におけるエンゲルス(邦訳岩波文庫八五―六ページ)、「婦人論」におけるペーベル(同、上二二―四ページ)の発言と比較せよ。

(16) *Notes de Ch. Baudelaire sur les Liaisons dangereuses.*

(17) 「法院長夫人(只一人、ブルジョア、に属する。重要な観点)。素朴で、偉大で、感動的なタイプ。感嘆すべき創造物。自然の女。心をうつエーヴ」(Notes. 傍点筆者)。

(18) この際ヴァルモンはその単なる媒介者にすぎぬ。

(19) ラクロが女子教育について何のカリキュラムも示していないのはおそらくこの理由による。

(20) 『婦人論』(上) 二〇八―九ページ。

(21) 「作者の見たものをほんの一部分たりとも黙っていないかぎりは……」 「この眼でじかに見ることのできた衣裳を選びました……」 (リコボニ夫人宛書簡、p. 211, 215)。なお『危険な関係』の主なモデルは、ラクログがグルノーブルに滞在していたとき、その社交界で得たものだという。

(22) 参考「ほかならぬ典型性が、リアリズム芸術の力、すなわち「人びとの模範となり模倣の対象となるに価いするような輝かしい芸術的形象」(マレンコフ)を創造し、一さいの否定的なものに諷刺の砲火をむける能力の条件となるのである」(ベ・メイラハ『文学における典型性と美的理想について』)。

(23) 参考、ミシュレ『革命の女たち』(河出書房)。

(24) 同書、九〇―九三ページ。